



花乃懷  
全



世に悠遊して余の志を和すの意固ま  
しむ古くは世にわらふも多し。是れは  
すなはちものたり。日月の光をうつし  
てこれ門に出入るるをくげらる。執  
法は先哲の教にまはる。洛東外は清  
水も多し。先哲の教にまはる。洛東  
外は清水も多し。先哲の教にまはる。  
洛東外は清水も多し。先哲の教にま  
はる。洛東外は清水も多し。先哲の  
教にまはる。洛東外は清水も多し。  
先哲の教にまはる。洛東外は清水  
も多し。先哲の教にまはる。洛東外  
は清水も多し。先哲の教にまはる。  
洛東外は清水も多し。先哲の教にま  
はる。洛東外は清水も多し。先哲の  
教にまはる。洛東外は清水も多し。

是を額に誌し、竹園に納りて、  
初らるる合資併一、  
香を揚せり、  
色一法好き、  
君う代の春、  
跡憶は、  
序先言、

又化、  
四、

流、

洛 清水寺奉納發心合額 惣計、六千余章

題春秋 皇都、

卷頭 凡う、  
木枕乃、  
雲霞や、  
梅の風、  
よきま、  
わきこ、  
雪や八、  
よをそ、  
岸もそ、

浮雪  
哥席  
狐三  
山樂  
淵亭  
一笑  
寄筵  
巳橋  
五嶺  
六書

ワレもくまををひんてまを林志  
鹿<sup>コシカ</sup>やうくまを立はは波口  
も深さやあつ下りる霧乃こ鹿  
船を<sup>フミ</sup>や油を池の幸つらうら  
あよ<sup>フミ</sup>うらうらお撲之  
あつ<sup>フミ</sup>き雲とお子や唐の雲  
おまを<sup>フミ</sup>かへる禿のあ  
七<sup>フミ</sup>あや<sup>フミ</sup>厨子<sup>フミ</sup>祈<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>おわ<sup>フミ</sup>け  
お<sup>フミ</sup>わ<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>れ<sup>フミ</sup>を<sup>フミ</sup>持<sup>フミ</sup>人<sup>フミ</sup>あ<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>魂<sup>フミ</sup>空<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>落<sup>フミ</sup>北  
餅<sup>フミ</sup>乃<sup>フミ</sup>皮<sup>フミ</sup>厚<sup>フミ</sup>う<sup>フミ</sup>茶<sup>フミ</sup>る<sup>フミ</sup>二<sup>フミ</sup>月<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>形  
ま<sup>フミ</sup>れ<sup>フミ</sup>山<sup>フミ</sup>石<sup>フミ</sup>を<sup>フミ</sup>た<sup>フミ</sup>く<sup>フミ</sup>て<sup>フミ</sup>礼<sup>フミ</sup>い<sup>フミ</sup>り  
塩<sup>フミ</sup>雁<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>飛<sup>フミ</sup>よ<sup>フミ</sup>お<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>て<sup>フミ</sup>ま<sup>フミ</sup>る<sup>フミ</sup>  
河<sup>フミ</sup>を<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>や<sup>フミ</sup>お<sup>フミ</sup>よ<sup>フミ</sup>お<sup>フミ</sup>さ<sup>フミ</sup>る<sup>フミ</sup>鬼<sup>フミ</sup>助<sup>フミ</sup>

雨稻 素行 馬柳 二柳 魚娘 友山 茶鳳 季德 三朝 一笑 然三 右国 李角

ある日よ<sup>フミ</sup>國<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>賜<sup>フミ</sup>乃<sup>フミ</sup>あ<sup>フミ</sup>る<sup>フミ</sup>言<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>  
峯<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>月<sup>フミ</sup>佛<sup>フミ</sup>法<sup>フミ</sup>留<sup>フミ</sup>を<sup>フミ</sup>宜<sup>フミ</sup>よ<sup>フミ</sup>あ<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>  
菱<sup>フミ</sup>板<sup>フミ</sup>冷<sup>フミ</sup>く<sup>フミ</sup>白<sup>フミ</sup>く<sup>フミ</sup>お<sup>フミ</sup>ぬ<sup>フミ</sup>老<sup>フミ</sup>女<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>形  
菱<sup>フミ</sup>虫<sup>フミ</sup>を<sup>フミ</sup>啼<sup>フミ</sup>や<sup>フミ</sup>里<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>元<sup>フミ</sup>乃<sup>フミ</sup>乳<sup>フミ</sup>よ<sup>フミ</sup>付<sup>フミ</sup>け  
虫<sup>フミ</sup>翁<sup>フミ</sup>や<sup>フミ</sup>和<sup>フミ</sup>平<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>庭<sup>フミ</sup>を<sup>フミ</sup>茶<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>花<sup>フミ</sup>え  
蜻<sup>フミ</sup>蛉<sup>フミ</sup>や<sup>フミ</sup>蓮<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>あ<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>れ<sup>フミ</sup>船<sup>フミ</sup>わ<sup>フミ</sup>け  
三<sup>フミ</sup>日<sup>フミ</sup>月<sup>フミ</sup>よ<sup>フミ</sup>洗<sup>フミ</sup>濯<sup>フミ</sup>よ<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>浸<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>也<sup>フミ</sup>  
鶴<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>巢<sup>フミ</sup>へ<sup>フミ</sup>細<sup>フミ</sup>寺<sup>フミ</sup>秋<sup>フミ</sup>を<sup>フミ</sup>お<sup>フミ</sup>き<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>利  
丁<sup>フミ</sup>ま<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>蜻<sup>フミ</sup>蛉<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>小<sup>フミ</sup>田<sup>フミ</sup>と<sup>フミ</sup>成<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>け<sup>フミ</sup>り  
秋<sup>フミ</sup>凡<sup>フミ</sup>や<sup>フミ</sup>ま<sup>フミ</sup>ひ<sup>フミ</sup>く<sup>フミ</sup>虫<sup>フミ</sup>乃<sup>フミ</sup>流<sup>フミ</sup>を<sup>フミ</sup>り  
出<sup>フミ</sup>て<sup>フミ</sup>あ<sup>フミ</sup>ら<sup>フミ</sup>お<sup>フミ</sup>き<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>日<sup>フミ</sup>也<sup>フミ</sup>び<sup>フミ</sup>め<sup>フミ</sup>れ<sup>フミ</sup>花  
お<sup>フミ</sup>よ<sup>フミ</sup>あ<sup>フミ</sup>ら<sup>フミ</sup>奇<sup>フミ</sup>子<sup>フミ</sup>出<sup>フミ</sup>らん<sup>フミ</sup>恩<sup>フミ</sup>仙<sup>フミ</sup>を<sup>フミ</sup>  
十<sup>フミ</sup>六<sup>フミ</sup>菴<sup>フミ</sup>や<sup>フミ</sup>夢<sup>フミ</sup>の<sup>フミ</sup>浮<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>け<sup>フミ</sup>り<sup>フミ</sup>也<sup>フミ</sup>

魚娘 季德 之三 魚娘 悟水 右国 我鳥 斗雪 五嶺 志水 守多 夷娘 其川

大舟をん説きかけりノありきなり  
衣箱を襦伏よ一ておんけり  
あう書に白魚海ぬ江乃南  
袖乞の孝女ノ遊りおろ月  
啼轉る乃漏さく老しり利  
單葉の舌を浸さん也乃滝  
白をぬをうくは急の小萩のれ  
小栗栴や露よ透るる栴嫌  
菊乃香や門よあ本のちり押  
腰えも利てはく一布萩乃唐  
炭焼をん聾の披高や楳調  
松建ニや世を小車乃始か  
起とらよるる冷なり秋のま

茶鳳  
曉列  
浮雲  
和常  
雨稻  
江獅  
藤之  
紅獅  
李閣  
紅獅  
山樂  
三朝  
二熒

雪や氷をあふさむる物ありけり  
家乃子のむくみ蹴や暮る  
衣箱の口足とぬすめり  
糸を裂きあはれ涙を垂よの秋  
吹よあうらふ人の祝を東よ蝶  
ちる栴をうんで居る二日奈うの如  
涙川よ其々の眉を吹まきり  
流りおとらうれ栴栴や初ま石  
清きゆるあふ女のまぶ秋の音  
初まや灯をとる竹よあまきる  
七子やほろぬ二川を川向ひ  
初丁や糸よ結り一照り  
急のゆらんあうりはなすま

霞樂  
湖栴  
花勇  
湖栴  
浮雲  
山樂  
二栴  
和常  
登龍  
文子  
玳莖  
斗百  
舎水

塩乃味カ合セテ干筋あり  
あまきー岸乃宿れ西来の飯  
芝居くさききふあけり  
眠くかろや兒のいけさ  
物代や止処をろくむ頬の皮  
破塵うけ使老く床後ろ紐  
鬼灯や妹く使乃初わとま  
菖入りみきて嫁と成るる  
秋餅や酒池肉林乃余るる  
ゆ遠く宿くの宿や秋ま風  
萩の多大一尺よなり  
山里や杉のあちる風呂乃  
宿くの運ひ仕舞や蕃椒

札延  
牙龍  
机筵  
茶鳳  
登龍  
寄樂  
蛙生  
里月  
鳥水  
蛙生  
悟水  
茶鳳  
一笑

ゆけり多やあは絶る五人法  
血て茶こるおとろく柙式  
油花トや后よまき兒女あ  
塩おの塩吹出して秋るゆ  
秋風や仕女をも連と刀自独  
差雨や初鹿よ泊りて黄ひ  
消て名を垂よ祝たる如影  
妻乃子まなき凡のりる色  
山くや丹乃掃扱く白雲寺  
むすよ女のみより秋のあり  
龜ままの先射まが海乃丹  
孝深まの應受もあり司召  
一法とのみりよ白く志

魚鰐  
漆賀  
茶鳳  
右国  
茶鳳  
六書  
一笑  
千柙  
正山  
馬柙  
珍磨  
斗雪  
為口

伏水

ゼ

四

去来古いまう形る天定あゆ  
林しきや灯籠も添てゆつ霧さ  
雲ゆくこめく白ひや木の西債  
一株ををちせいの敷のト治る南  
漕抜る舟ぬす人やねちる舟  
施菜もる不老の門や葉白ふ  
小葉石あよここの流まきり  
思ひ祢乃よと成まきり初阿比  
花母系傳よする兒を送りる  
彩綿や汀田へくる旅芝居  
競るくなく眼乃りや霧小袖  
あつて船虫の夢伸まきり  
待くねまきよあきり死まきり

羅漢 鬼丈 湖舟 車南 貝岬 魚娘 千拵 探水 季川 浮雪 和常 二變 羅漢

秋まや入るまきり何ふさお  
美餅や有りよまきり  
仙よりゆて養をされまきり葛椒  
秋まよをまきりまきりや常陸夢  
嘆や葉未まきりまきり小むさき  
色と板やまきりまきり秋の凡  
石とちまきりまきりや帛ひま  
成中まきのひ凡すまきり京の和こ  
まきりあまきり西凡のまきりや木は秋  
まきの氷を砕まきり流まきり  
上まきりあまきりまきりお上時  
橋餅や枚子を削るまきり二行  
まきり合ぬ凡中まきりあまきり売まきり

魚娘 霞染 机筵 浮雲 芦鶴 一笑 君川 全 呂人 茶鳳 千遊 魚娘 悟水

系乃方向て藤の葉や熟乃秋  
維多湯や身北中山麓の庭を  
苜長て杖ともありはまきり  
茶の葉れ下て露冷立場  
花の葉の居よとと重外也  
頂广琴をたもやあせん荒山  
羨たよとよ出ま十里の毛世  
二三艘舟も急りて浦乃秋  
柿よ出て竹の伏えて暮る  
菽入や行のわ凡香の川  
呉湾や葉折灯葉乃一宿  
川中よ合戦の跡や若る麦の毛  
栲嶮や能くせ付て物案り

船をちやあよ星よゆる牧乃未  
迎ふハある在祈中四難餅  
玉味崎よ暮遠かふる席り式  
浮岩乃教按小日や藤子  
あまよよ核りてまよ一晩の毛  
おとろよれ浮名立不と上よれ  
猶素や麗ある水まう人  
霸王樹乃うゝ表あま牙を我  
け里も様よまよさ笑ん那  
追人もたうて鴨立夕か難  
あまやや葉火焚ゆる弱法師  
けまよ付てあけを足もう那  
新橋やむつらう無さ里乃馬

呂八  
雨稻  
淵亭  
雨稻  
貝岬  
鳥水  
李閣  
吐虹  
茶鳳  
魯村  
李閣

夷娘  
北嶺  
山樂  
露山  
夷娘  
羅溪  
五箇  
里月  
浮雪  
登龍  
二葉



鏡餅よあはれ流るる送りりく包  
 後の月一展風乃去りかりの葉  
 文てよむみまうはるぬ流川  
 叙賞る胡坐乃夏や何より夕  
 七草よ下子のかさまるもあられ  
 終り利さ山葵子噫ニツの形  
 今更子ふ孝悔りたまふり  
 綿木を建てて宇よれ持衣れ  
 袖うかほは雲苑の家や暮糸り  
 葛のそよおちぬ秋れかゝるかか  
 展風よ八唐主人やひあ乃るん  
 船舟の町あともぬる月日この形  
 維子事や袖よ人あき船何りけ  
 行てやふる工天秋あさるん何免  
 心るに凄きなうとや阿きの水  
 海苔の香や去凡誘ふ十六語  
 妹くこれりとりさきておとりの  
 霸王樹よあを秋と成りる  
 かせりくくさるる葉の宇このあ  
 足もい出しくさすくさや嵐茸  
 隣日士梅合ふ垣まの五か木家  
 灯もねく里や凍かき  
 石梅やあ笑の供年のかきほり  
 瘦こけて秋ちりしむめさる  
 眼さ人しぬ人もほらんかまの月  
 雲返や流苔を砧のねうさ

今 二柳 季徳 觀鴨亭 車南 和吊 机筵 車南 浮雪 魚娘 淵亭 池雨 朱扇  
 六書 合水 梅子 寄當 茶鳳 文子 士口 車南 右国 豊水 我笑 采夷 右雨

東と西乃がよみたり、海の風  
道不美子治れんを傳のり前  
釣名々やみり替りの笑れ人  
猶書や流るのき歌浪の上  
お梅やあつら太系の夢れ功  
造るるよ消る危やまゝん言  
唇あ楼底乃底よ光りく電  
粟刈や夕日乃日暮る宝塔寺  
奇機美の江口を出るる雲の書  
ちる毛や書ふと静り面て少毛  
夕風の懐潜るんれ世か那  
を命や一日南よ眠る承二足  
をのまゝきよん後リリり色

六書  
其鶴  
三朝  
曾村  
魚粮  
指月  
雲卧  
茶鳳  
六書  
全  
字階  
鞠亭  
山集

物多し 必あてあ我を吹  
炭地へ茶よ来る冬を治よる  
ゆゑあ詩身乃長や葉の葉  
舟かしてそくくらまゝる犯う飛  
うろくくもその里やゆり  
突返よまき面の凡乃光りかお  
萩萩をさそふあ〜や壺石  
人の心〜皆送り火の煙りれ  
虫鳴やもんあう書〜一里塚  
茨藪やかわらうよ書る清見灘  
釣魚のせめてち〜ぬを命可れ  
車のみを史記の冊とさめい色  
蜻蛉は竹三尺の百くけ〜那

馬所  
一雪  
寄樂  
魚粮  
牙龍  
三朝  
鳥水  
其ト  
石因  
淵亭  
六書  
梅子

祝柳のきつり熱くや向入度  
 身は社をまぐる世路やまはり  
 水清いや西流子よるまのま  
 表川や来て吹き茜うらぬ  
 娘乃牧やまの戸出るかさの戸  
 豆よふをみす隠え祿師か  
 人志ぬ後房のや木槿垣  
 桑植る地や土珍おとあ  
 師と合もまき笛や来乃月  
 まのこや総も路る衆のまき  
 乃すく温くまあやまみま  
 紫雲のつ油は砕くまのま  
 後人の今持りり二日ま月  
 父母まのま持りり近ひ境  
 嫁まのままらりり恵か棚  
 報付てま越はるや約りすま  
 蝶と蝶おまらりりまのまらり  
 房月や此世の法切して萩の色  
 猫持て信りもまらりり引  
 山吹や世まの級ぬ骨をた  
 すり神のまの合ぬまのま  
 社まのまのま二日ま  
 任まのまのま里あり柳曆  
 二日まのまの拍子振りりま  
 尺八の女なりりり夜る乃花  
 け君のまのまのまのま

六書  
 玉才  
 有因  
 一英  
 今  
 今  
 季徳  
 寄樂  
 夷娘  
 觀鴨亭  
 冠於  
 思入  
 里  
 車  
 寄樂  
 二柳  
 曉列  
 夷娘  
 二境  
 浮雲  
 机筵  
 季徳  
 魚娘  
 二焚  
 觀鴨亭  
 羅

梅とかなるけりまや五かまうき  
司はむうれ親乃名と成りぬ  
涌る中よえん先あま子の眼ま色  
射旁や未の海もなすし出如し  
耳千多底よかけつ柿の糸  
物繫く門乃ゆとくや松かきり  
美月よ吹まてうるさ枝の那  
うらま来て膝かえくくその狂  
妙草や未の海もなすし小松系  
糖子崎やおかり歌を竹の月  
虫指や母なるこもかみやこ  
柳ちやうく寺所の卒於盛垣  
塚よ海よかへあまもや松の花

登部  
里月  
和常  
吟之  
夷娘  
里月  
和常  
一枝  
音山  
梅子  
寄富  
蛙

暖やこ雲まきまて世る麦の花  
谷越く世の物乃をまうぬ  
根よ虫鳴母ま乃別まかぬ  
おつるをちうけん売やま乃うせ  
人の先を浅し核系の奥の屯  
秋立や川よ先うり灯乃くまひ  
まき思を鏡し後夏の目母ふ  
家とかりとと成りうりせ  
物重限や補ようけさる筒さり  
昔の後の抜出極や傀儡師  
近はよ成て牡丹の分根の形  
福有て祈をゆり梅乃月  
小僧あて母の薬局や三井湯

芦  
二葉  
雨宿  
夷娘  
南枝  
三巴  
千栞  
都雪  
其十  
鳳尾  
寄録  
籬録

子もあのを走り下りて木成り  
 切落す川よ藤登の堤か那  
 物思乃花よ見し夏忘まきり  
 孤のよくとたへり二日矣  
 流離やなまぬ水のさうい  
 岩を碎ておろるをみらる那  
 梅枝よ思ふ程雪のかみぶ  
 一ちこれ極よ掛ひくかきりか  
 物思やゆり川の氷あかり  
 妻凡や北へ傾く了乃岸  
 初之や華よかふるきり  
 二柳

追加  
 わかづるをいづるも  
 睦齋

歌仙初裏合 惣討百八十余連

通り句  
 かつり振寄も起る先陰  
 あつりの末は戦くまを井

あつりあつておん連ふりふも  
 ちか月まうついでた日ま  
 赤まよ好身とりへ可きさ  
 まかぬくくを西進は白  
 目花乃乃を志おへま下屋ま  
 かつり梅さるも  
 けいさるまゆなれ見乃かこ梅  
 ふきるをい浪のりゆ  
 まつり梅さるを西進は白  
 清くおぬ小るなま  
 まつり梅さるを西進は白  
 二日月  
 淵亭  
 湖舟  
 有國  
 魚粮  
 宗瑋  
 登龍

社を此舞々としみよる海草は  
律を合々〜 琵琶乃印月

魚養

茶れ水のみまじりて海魚へ福まき

海斜

二人乃歌を肩てまきし  
難法も旅くまのしるまきあは

淵亭

舟乃まはれ昔も初〜をまの海な  
相〜まの心籠の海〜

湖舟

金屏〜玉藻乃希れ〜り歌  
よ〜るまの偉大嶽乃を

路周

ま〜もま〜と鹿酒か〜  
舟れ古ま〜ま〜の海

魚粮

ま〜もま〜と鹿酒か〜  
舟れ古ま〜ま〜の海

季徳

ま〜もま〜と鹿酒か〜  
舟れ古ま〜ま〜の海

寄

瓶と琵琶の秘曲哉 算れを〜  
嵐ま〜ま〜

古洞

海草〜山遥〜る里〜るま  
白登ら〜る〜るの海

友山

神寺此法代かくしゆの海り也  
百まの脚も〜る〜る

魚粮

今も今もま〜ま〜る〜る  
古海も海と海り海も

斗雪

ま〜ま〜と山〜る〜る  
海〜る〜るの海り海

カモ 浮雪

ま〜ま〜と山〜る〜る  
海〜る〜るの海り海

山樂

風も所〜る〜る小宰おの海  
ら〜る〜るの海

茶鳳

海り海申下〜る物法も〜  
ら〜る〜るの海

牙竜



く山吹の翁をひきき

後後も有りて吊入百年忌 季徳

み湖の冥府をさする月影

うたの社を燃し弱法師 海彦

お樹のやれ急く黄昏

あふふふその物羅短志あり 湖舟

いと急やうい何をもさす

花色出さず跡ふ今春を小る 全

うらのぬるちも

我ふくは墨入のかち侍はか美 二柳

きのつと申一斜陽暮

具足徳馬神の小判入く 友親

孤子の襟もさき徳乃風

一二ふ侍も侍は 路周

晴あいの侍入るの友

社外く徳一は侍は侍 梅斜

徳を侍は侍は侍

多物ふ花の香をく荒 冠布

春風乃月吹たれ花え

琵琶乃流きとく社も多ゆ 和常

清水を三文字

侍の形 世書 君川

あつり斗も子もあつり

細くふ品は侍の合め 巴丈

具肩をく其大阿ふ侍も勢て

由るの三戸ける徳小を侍も 湖舟

さつりて侍も侍も

侍も侍も侍も侍も 二瓊



まろけいあまのまろけい

御文（た）れとくくさるる

古洞

和徳（た）つとくさるる

和徳（た）つとくさるる

寺徳

常（た）つとくさるる

常（た）つとくさるる

古洞

見（た）つとくさるる

見（た）つとくさるる

ト天

呼（た）つとくさるる

呼（た）つとくさるる

魚養

あ（た）つとくさるる

あ（た）つとくさるる

有國

精（た）つとくさるる

精（た）つとくさるる

淵亭

古（た）つとくさるる

古（た）つとくさるる

魚養

東（た）つとくさるる

東（た）つとくさるる

友親

研（た）つとくさるる

研（た）つとくさるる

君峰

志（た）つとくさるる

志（た）つとくさるる

有國

右百八十点

か（た）つとくさるる

か（た）つとくさるる

路周

有（た）つとくさるる

有（た）つとくさるる

席良

凡（た）つとくさるる

凡（た）つとくさるる

淳良

一（た）つとくさるる

一（た）つとくさるる

其川

りつ神 あつひのそと あつひのそと あつひのそと

浮雪

吾はみ あつひのそと あつひのそと あつひのそと

点粮

青女房 あつひのそと あつひのそと あつひのそと

湖舟

今ふ あつひのそと あつひのそと あつひのそと

浮雪

笑こと あつひのそと あつひのそと あつひのそと

雲臥 大ッ

あつひ あつひのそと あつひのそと あつひのそと

牙籠

絲瓜 あつひのそと あつひのそと あつひのそと

其軒

あつひ あつひのそと あつひのそと あつひのそと

照鏡

あつひ あつひのそと あつひのそと あつひのそと

我笑

あつひ あつひのそと あつひのそと あつひのそと

楚梁

右二百点

あつひ あつひのそと あつひのそと あつひのそと

有国

あつひ あつひのそと あつひのそと あつひのそと

寄第

あつひ あつひのそと あつひのそと あつひのそと

湖舟

あつひ あつひのそと あつひのそと あつひのそと

友親

あつひ あつひのそと あつひのそと あつひのそと

机筵

かきまの力の入れまぢま  
歩うりふめふふもは乃神  
友親

古佛ことごとくは乃其屋の  
今  
友親

あつらひりおきては乃  
力風

夕ひまかくは乃ふも乃日  
登竜

花も乃我も夢乃乃乃乃乃  
一滴命

我身も目出乃乃乃乃乃  
牙龍

眼も乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
今

細代乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
浮雪

大小乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
斗雪

まろ乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
浮雪

籠かく乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
魚娘

二乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
有国

耕乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
斗雪

と乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
古洞

右二百二十頁

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
斗雪

ゆたか温帯の川乃魚はも  
ちふゆきふとり猿の雄も

魚卷

若きしやう丸月より見  
焼もくや考まき抄は乃初時

六唐

お陰にれは経のあらも  
魚あふる日七尺乃

有國

葉のわ戸まきとて香  
美つし列みお衣布能と曳

全

比日おまよふをまよつ  
二階に完つとてはのさくさく

貝岬

路はくさの所枝おの有  
おさくさく馬も

有國

おまもめ虎のわく中  
ゆのゆきまめさかす

机筵

かすり振るも  
軍現乃もはつとつと利凡

石田

はのわく考まの肌を焼  
まきしとて流とけれ

烏夫

あさりのそ湯  
射場殿へ送る能感あより飯

隻虹

路の志すれ海あやわ  
表産もれかぬ江戸の町

梅斜

はの破るまきりさく  
あさりのあまをまきりさく

魚粮

雨風もまきりさくね  
男のあまをまきりさく

斗雪

おまもめ虎のわく  
御殿とてさ乃蔓陀羅

里月

おまもめ虎のわく  
算すくさく入ある能

浮雪

花のゆき十九う船や伸  
花のゆき十九う船や伸

貝岬

化粧を垂け粧垣の弁

六龍

二乃尻に浸弱くも物うら

貝岬

うらうらと降り降り

浮雪

者二百三十点

うらうらと降り降り

路周

うらうらと降り降り

二葉

うらうらと降り降り

魚娘

うらうらと降り降り

市徳

うらうらと降り降り

兵秀

うらうらと降り降り

宇樂

うらうらと降り降り

本国

うらうらと降り降り

全

うらうらと降り降り

鷹雄

うらうらと降り降り

範來

うらうらと降り降り

山樂

者二百五十点

あまのついでに衣もあててはるは  
あまのついでに 朝日のついでに

魚糠

餅煉乃まきし馨しく 旅乃空

全

いとけきあはれゆく 嘆きめはるかに  
いとけきあはれゆく 嘆きめはるかに

斗雪

あまのついでに 朝日のついでに

魚糠

あまのついでに 朝日のついでに

全

あまのついでに 朝日のついでに

浮雲

あまのついでに 朝日のついでに

梅徑

あまのついでに 朝日のついでに

浮雲

右二 六十四点

下乃白附石 清き高き下さき

有國

水ももあまのついでに 朝日のついでに

宮錦

宇治の山を月さき 雲をくさき

浮雲

我乃あまのついでに 朝日のついでに

有國

滝もあまのついでに 朝日のついでに

全

あまのついでに 朝日のついでに

六書

右二百七十点

考す於奈はのいれをそめて  
園よりぬき馬も少さきよ

梅斜

云のまはれ花も花も乃冬様

六唐

あまのちのちのけきあのかりき  
あまのちのちのけきあのかりき

布丈

者二百八十点

水乃栄くちを 是より何れ

有國

雛まら鳥まらへ美およ物うき

其川

佛とぬいそとてい何れ

六響

石一百点



